

【書言字考節用集 二時候】

嘉祥傳云、仁明帝朝、承和十五、六月、豐後國獻「白龜」、故朝廷設「宴」、改「元」於嘉祥、「是濫觴」

嘉定傳云、後嵯峨帝潛龍時、以「宋嘉定錢十六文」、此日適有「下設」饌供「之義」、踐祚後猶用「其式」、是權輿

【武徳編年集成 四十四】

慶長三年六月十六日、夜「入嘉祥」ノ祝アリ、秀吉ハ上段褥ノ上ニ蒲團ヲ布テ著座、秀頼其傍ニ侍座セラル、其下段中央ニ、片木ニ色々ノ菓子ヲ積ンデ並ベ置、此席ヘハ、中老、五奉行、近習ノミ出座シテ是ヲ頂戴ス、其餘每席如「是」ノ品々ノ菓子積ミ置、官職ノ高下ニ依テ其席ヲ異ニシ、皆菓子ヲ得テ退クコト恒例ノ如シ、（後略）

【徳川年中行事 六月】

十六日

一、嘉定御祝儀在「レ」之

一、出仕之面々染帷子長袴著「用」之、表向五半時各登城

一、御三家方、同嫡子方、松平加賀守、松平左兵衛督ハ登城無「レ」之

但松平加賀守、同嫡子、部屋住之内ハ登城、大廣間ニ著座、御祝頂戴之在「レ」之、

家督ニ而者登城無「レ」之

一、辰中刻西詰橋通大納言様御本丸「江被」爲「レ」成、御禮過而被「遊」還御「

一、辰下刻大廣間公方様大納言様出御「長袴」御先立 月番老中 公方様 御刀 御小性

大納言様御刀 御小性 御中段御著座「御袴 御刀掛」

一、月番之老中ハ、二之間御縁頼二本目御柱際著座、

一、老中之内壹人、二之間北之御襖障子之方一本目御柱際ニ著座、

一、溜詰外之老中、西丸共三之間御縁通、衝立之内氈之上ニ列居、

一、御奏者番者同所、老中向通板縁伺公、

但京都諸司代、大阪御城代、在府之節者、老中之次ニ著座、

一、御禮著座之次第

國持
御連枝方

侍從已上

右壹人宛出席於「懸椽」御目見、直ニ御向ニ著座、此節 御熨斗餅「御三方 御給仕」 兩御番頭

御菓子「御三方より三ツ」 右同斷 右順ニ持ニ出之「備」御前「江も」著座之面々 御菓子出「レ」之、給仕

進物番役御前「江被」召「上」之、「何も頂」戴之、「御熨斗」より之御菓子引「レ」之、著座之面々御

菓子持「レ」之、末座より退座畢る、（中略）

一、今朝出御已前より大廣間ニ之間より東方迄、御菓子順々並「置」之、「一熨斗」もち 數

貳拾壹宛 一饅頭 三宛 一羊羹 五宛 一鶉餅 同 一よりみつ 三十宛「志んこ黄白」

一あこや 廿一宛「いたゞき白」 一きんとん 三十宛、白団子也、「青豆粉黒こま付」 一ふ 五宛 右

八品、一品宛粉ニ檜葉敷「レ」之、其上ニ右御菓子盛「レ」之、南北「江」貳拾六通り、東西「江」六十九

通、都合千七百九十四膳置「レ」之、（後略）